



幽霊・妖怪の怪異譚を通して、人間や社会を探る



古代の神話や物語にも神霊や「もののけ」は多く登場しますが、幽霊や妖怪などの怪異譚が隆盛するのは江戸時代(近世)です。小説のみならず、浮世絵・演劇(歌舞伎・浄瑠璃)・落語・講釈などにも幽霊や妖怪はたくさん出てきます。まさに近世は怪異流行の時代と言ってよいでしょう。〈日本の幽霊・妖怪〉について講演でお話すると、「幽霊は実在すると思いますか」とよく訊かれます。「分かりません」としか答える方がありません。実在するか否かでなく、怪談を生み出す〈人間の心のあり方〉や〈時代ごとの社会相〉を知りたいのです。だから怪異は、国文学・民俗学・歴史学・宗教学・倫理学・社会学・文化学・心理学など、あらゆる分野で学際的に考究されているのです。

佐伯 孝弘 教授

◆さえき・たかひろ

1962年佐賀県生まれ。東京大学文学部卒。同大学院(人文科学研究科 国語国文学専攻)博士課程修了。文学博士。専門は日本近世文学。近年の共著として、『古典文学の常識を疑う』(共編、勉誠出版、2017年)、『浮世草子大事典』(共編、笠間書院、2017年)などがある。



教えて佐伯先生!

庶民の生活の実相に触れる

古典文学

近世文学(江戸文学)は何を学ぶの?

古典の中でも江戸時代(近世)の作品は、高尚な内容のものより、非常に庶民的な内容のものが主流です。しばしば、お金や色恋など、当時の庶民が日々暮らす上で避けて通れない事柄の具体相が、いきいきと描写されています。よって、文学作品を通して当時の風俗・生活などが窺われ、逆に、当時の歴史や風俗をある程度知っていないと、文学作品を的確に解釈することができません。それが近世文学の、〈面白さ〉でもあり〈難しさ〉でもあります。



岩波文庫『江戸怪談集』(上・中・下)
著者：高田衛 編・校注
2002年、岩波書店



ひとこと解説

原則として、江戸時代(近世)の小説には挿絵が付いています。絵が、作品読解の鍵となることもあります。

古典の怪談の白眉は上田秋成の『雨月物語』ですが、『江戸怪談集』(上・中・下)にはそれ以前の多くの怪談集から、様々な短編が集められています。上図左面の挿絵は、仮名草子の『因果物語』の一話。三角関係を清算しようとした男が愛人を船から落とし殺した途端、女が蛇になって男の腰に巻き付いた場面。挿絵が付いていたり、絵が主体のもの(草双紙)もあって、絵からの作品考察ができるのも近世小説の魅力です。

佐伯先生って
どんな先生?

- ◆妖怪先生!(良い意味で)◆笑顔◆不思議な先生◆授業中の先生のお話が面白い。◆学生思い◆夜行性◆0時にメールしたら午前1時に返信が来てびっくり◆浅草ツアーや古本街ツアーなど、授業以外での交流が多く、とても楽しいです。◆谷中散歩の企画は最高です!◆酔うとさらに面白くなる◆「来る者拒まず、去る者追わず」(先生のモットーです)◆ギャグが寒い◆熱中すると一直線(=講義が伸びる)

[回答:佐伯先生ゼミナール生]